

## 第4群—3

### 看護職者の仕事継続の不安と個人背景の関係

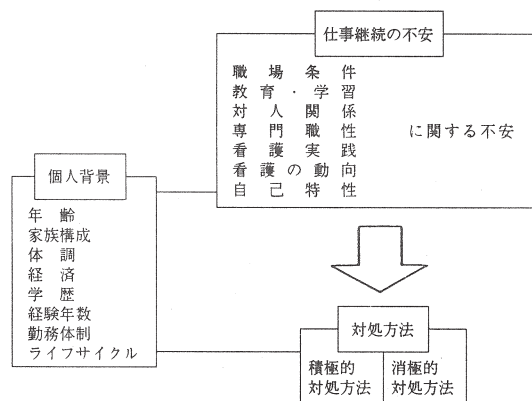
○村上和子 福田春美（高知市役所）  
岡村文子 長 幹子（県立中央病院）  
近佐文路 藤原志保（松田病院）

#### 1. はじめに

医学の発展と医療システムの複雑化・社会構造の変化により、看護職においても看護の質・量共に変化・増大してきている。既存の調査研究の中で、看護職が人間関係や労働条件・自己の能力・仕事内容・ライフサイクル上の問題・健康問題等に悩みやストレスを感じながら日々の業務を行っている実態がみられた。看護職の担う役割・機能が変化している現在、仕事を継続していくには先の予測がつきにくい不安な状況である。今回、仕事を継続していくうえでの不安とその対処法について調査を行い、個人背景との関係を明らかにすることを目的として分析を行ったので報告する。

#### 2. 要因図

仕事を継続していくための不安の領域として<職場条件><教育・学習><対人関係><専門職性><看護実践><看護の動向><自己特性>の7つを抽出し、その不安の対処法を<積極的対処法><消極的対処法>として要因図を作成した。



#### 3. 研究方法

A市内の公立・私立の病院・施設に勤務する管理職以外の看護職300名を対象とし、要因図に基づき質問紙を作成し実態調査を行った。質問紙は個人背景と「仕事を継続するうえでの不安」33項目、「不安の対処法」24項目の計57項目とした。これらを評定尺度法5段階1～5点法でスコア化した。結果処理は統計ソフトHALBAUを使用し、基本統計量解析、平均値の差の検定、ピアソンの単相関係数で分析を行った。

#### 4. 結果及び考察

##### 1) 対象者の特徴

アンケート回収は276人（回収率92%）であった。

年齢は20歳～69歳、平均年齢36.8歳であった。25～29歳・30～34歳が共に56名（

20.4%)と最も多かった。職種をみると、看護婦が196名(71.7%)、准看護婦46名(16.7%)、保健婦28名(10.2%)、助産婦5名(1.8%)であった。経験年数は、5～9年が55名(20.2%)、10～14年が54名(19.9%)となっていた。

## 2) 分析結果

### ① 仕事を継続していくうえで感じている不安の平均値

7つの仕事継続の不安のカテゴリーの平均値をみると、＜看護実践＞に関する不安が3.31と最も高く、次いで＜専門職性＞に関する不安3.27であった。一方、低かったものは＜対人関係＞に関する不安2.62であった。質的なものへの不安は社会に求められている看護の役割を認識しているとも考えられ、専門職として看護職自身の努力と研修にも新しい看護の動向や情報を取り入れていくことが必要であると考えられる。

### ② 個人背景と不安との関係

個人背景として年齢・家族構成・経験年数・勤務体制・自己研鑽について、不安との関係をみた。家族との同居の有無と＜教育・学習＞、＜看護の動向＞に関する不安の間に有意な差がみられ、家族と同居している方が不安が高かった。家庭内の悩みの有無と全ての不安の領域の間に有意な差がみられ、悩みをもっている方が不安が強かった。自己研鑽と＜教育・学習＞に関する不安の間では、自己研鑽している人と時々またはほとんどしていない人の間に有意な差がみられ、自己研鑽していない人の方が教育・学習の不安が強かった。経験年数についてみると、＜教育・学習＞に関する不安で5年未満に比べて5年以上が、学習機会の増加に不安がみられた以外は統計的には年齢と同様な違いがあった。

### ③ 年齢との関係

仕事を継続していくうえでの不安の7つのカテゴリーと年齢との関係をみると、＜職場条件＞＜対人関係＞＜看護の動向＞に関する不安の間には弱いながらも相関関係がみられた( $R=0.22\sim 0.33$ )。

これらについて年代別にみると、＜職場条件＞に関する不安では20・30代と40代の間で有意な差がみられ( $P<0.01$ )、40代に不安が強かった。＜職場条件＞に関する不安のなかでは「看護方式・業務分担」に同様な関係がみられた。＜対人関係＞に関する不安では20代と40代の間で有意な差がみられ( $P<0.01$ )、40代で不安が強かった。＜対人関係＞に関する不安のなかでは「同僚間のつきあい」に同様な関係がみられた。＜看護の動向＞に関する不安では20代と30・40・50代の間で有意な差がみられ( $P<0.01$ )、年齢が高くなるに従い不安が強くなっていることがわかった。＜看護の動向＞に関する不安のなかでは「コンピューターの導入」「医療機器導入」「新しい専門職種の出現」において、20代に比べて40代以上に不安が強かった。年齢が高くなるに従い、仕事継続の不安が強くなっている。不安が強くなるのは40代からであり、質の高い看護サービスが求められる社会になって、必要とされる看護方式・コンピューター・医療機器の導入等に適応していくことが困難な様子が見える。今後は、年代間の特徴を生かした役割分担をしていくことが必要であると考えられる。